

中央マケドニアの古代都市に関する考古学調査の現状

松尾 登史子

Current Research on Ancient Macedonian Cities

Toshiko MATSUO

キーワード：古代マケドニア、考古学調査都市遺跡、中央マケドニア、ペラ

Key-words: Ancient Macedonia, archaeological research, cities-sites, Central Macedonia, Pella

1. はじめに

かつて古代マケドニア王国の栄えた地は現在バルカン半島南4カ国に跨るが、ギリシア領マケドニアが主要な表舞台であり、王国関連の都市遺跡が多く出土している¹⁾。とりわけその心臓部にあたる中央マケドニア²⁾における近年の発掘成果はめざましく、ヴェルギナ (Vergina)、ペラ (Pella)、ディオーン (Dion)、コパノス・レフカディア (Kopanos-Lefkadia)、等の遺跡の発掘調査は着実に進み、日々新たな発見を積み重ね、在りし日の姿について情報を更新し続けている³⁾(図1、2)。これらの都市遺跡には、方格状都市計画⁴⁾として知られる整然とした区画と道路網、都市中心部を形作る特徴的レイアウト等の存在が確認され、ギリシア都市のみならずヘレニズム都市文明との接点も見出されている。本稿では、中央マケドニアにおける古代都市遺跡について、研究史を踏まえつつ考古学調査の現状を報告し、評価と展望を述べる。

2. 主題の背景：古代マケドニア研究・調査史

古代マケドニアを語る古文獻は稀少であり、当該地域の研究における考古学調査の役割は大きい⁵⁾。しかしその考古学研究史は南部ギリシアと比して浅く、19世紀前半に軍事的目的を以て現地に入った外国人らにより開始された。当時は古物蒐集や遠征軍の踏査という形で行われ、都市遺跡については、L. ユゼ (Heuzey) が古都フィリッピ (Philippi) を始めとした東マケドニア⁶⁾、中央マケドニアのパラティツィア (Palatitsia) 周辺、そして西マケドニア⁷⁾ など各地を調査して報告している (Heuzey et Dau-met 1876)。第一次大戦時には協商国により張られた前線に駐屯した英仏軍人らが史跡を探索し、1920年代には考古学調査が活発化する。フランスは東マケドニアの沿岸地域に入り、タソス (Thasos) 島やフィリッピで総合発掘調査を開始した。米国はハルキディキ (Chalkidiki) 半島

のオリュントス (Olynthos) の発掘調査を行った。英国もマケドニア各地の調査を意欲的に行うが、なかでも N. G. L. ハモンド (Hammond) はマケドニアを含めた北部ギリシアの歴史地理研究を進め、完成度の高い総合的研究を行った (Hammond 1972; Hammond and Griffith 1979; Hammond and Walbank 1988)。

一方、1913年のマケドニアのギリシア王国編入に際し、漸くギリシア考古学局の活動がマケドニアの地でも開始される。G. イコノモス (Oikonomos) はいち早く1914年にペラの発掘に着手した。1930年代に Ant. ケラムプロス (Keramou-poulos) は西マケドニアの調査に入った。また、G. ソティリアディス (Sotiriadis) はディオーンの発掘に着手 (1928~31年)、また K. A. ロメオス (Romeos) は、テッサロニキ近郊のカラブルナキ (Karabournaki) の調査、またユゼのパラティツィアにおける発掘を引き継いだ (1938年)。

内戦 (1943~49年) を経て政治が落ち着いて経済が徐々に上向き、市民の生活が向上していくなか、ギリシア人の手による数多くの本格的発掘調査が行われるようになる。中央マケドニアでは、1970年代後半に王墓と比定された未盗掘の古墳が発見され注目を浴びたヴェルギナで、墳丘を含む墓域と都市域が調査により明らかになり、新王都ペラでは方格状都市計画⁸⁾を施した広大な都市遺跡が現れた。オリュンポス (Olympos) の麓ではディオーンでヘレニズム~ローマ期の都市部と広大な神域部が明らかになり、その他、ヴェリア (Veria)、エデッサ (Edessa)、コパノス・レフカディア、テッサロニキ等に都市遺跡が出土し総合的発掘調査が行われた。西マケドニアでは、ペトレス (Petres)、エアニ (Aiane)、コザニ (Kozani) などの都市遺跡が発掘され、東マケドニアでは、アンフィポリス (Amphipolis) において広大な区域が調査され、その他数々の集落遺跡も調査されている。



図1 マケドニアにおける都市・集落遺跡（先史～ビザンツ期）分布図（枠内は図2参照）

このように今日のマケドニア地方では多くの遺跡の発掘調査が進行中であり、そのなかには大規模な都市遺跡の他、比較的小規模の集落遺跡も無数にある（図1）。そして、これらの遺跡を個々のものとしてまとめた報告、あるいは特定の出土品や建築遺構に関する分布の調査などが行われてきた。

一方、マケドニア全体及び各地域別で取り組まれてきたのは、地理的視点からの都市及び集落の位置に関する研究であった。マケドニア全体に関しては、F. パパゾグル（Papazoglou）がローマ期マケドニアにおける集落の地理上の位置に関する研究をまとめ（Papazoglou 1988）、M. B. ハゾプロス（Hatzopoulos）とL. ルコプロス（Loukopoulos）は中央マケドニアの古代道路網に関する研究に取り組み（Hatzopoulos and Loukopoulos 1987）、M. ギルツイ（Girtzy）が文献史料と考古学史料を駆使してマケドニアの集落遺跡の歴史的位置を吟味した（Girtzy 2001）。地域別に関しては、東マケドニアの集落に関する研究（Samsaris 1973）が早くからあったが、各地の発掘調査が進んだ1990年代以降、その結果をまとめる形で数々の地域研究が行われた⁹⁾。都市および集落遺構の分布調査やそれらの特徴を体系化した研究について、M. シガニドゥ（Sigani-dou）やM. リリンバキ・アカマティ（Lilimbaki-Akamati）

のマケドニア古代都市の特徴についての言及（Sigani-dou 1988; Lilimbaki-Akamati 1999）や、歴史的見地からの古代マケドニアの都市研究（Kahrstedt 1953; Mikrogiannaki 1977; Hammond 1991）も見受けられる。

3. 主題：中央マケドニアの古代都市に関する考古学調査の現状

中央マケドニアにおける古代都市遺跡の分布

ギリシア領マケドニアにおける古代マケドニア王国期（アルカイック期～ヘレニズム期）の都市・集落遺跡は今日までに数多く確認されている。そのうち、中央マケドニアにおける都市・集落遺跡は49遺跡を数え（2003年時点：図2参照）¹⁰⁾、現在も増加中とみられる。ただし、これらの中には都市・集落名が不明のものもあり、古文書や碑文、古銭等からの情報により都市と確認されて都市名の同定に至った遺跡、あるいは集落名が同定されている遺跡は限られている。M. H. ハンセン（Hansen）らによるコペンハーゲン・ポリス・センター（The Copenhagen Polis Centre）の集成・報告では、アクシオス川以西のマケドニア¹¹⁾においてかつて存在したとみられる17都市、25集落がリストに挙げられている¹²⁾。うち、都市に関して、中央マケドニアの都市は15であり、更にその中の13都市に

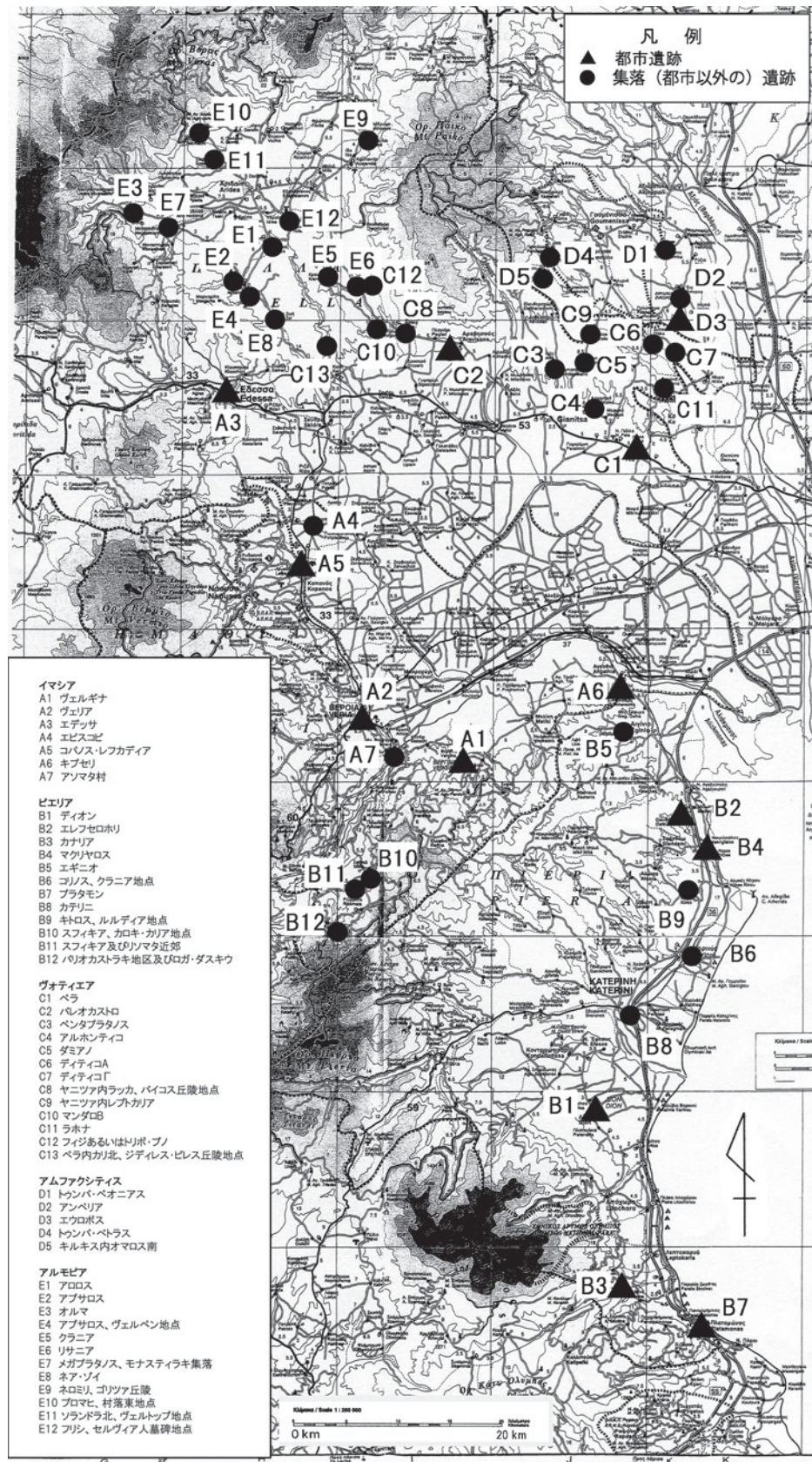


図2 中央マケドニアの都市・集落遺跡（先史～ヘレニズム期）分布図（図1の枠内を拡大）

表1 中央マケドニアの古代都市と遺跡 (アルカイック期～ヘレニズム期)

番号	古代都市名	都市遺跡	位置 (図1-b)	地域	主な出典		備考	番号
					H & N 2004 no.	Girtzy 2001 no.		
1	Aigeai (Aigaioi)	Vergina	A1	I	529	1.1	詳細は本文参照	1
2	Allante (Allantaios)	—	—	Am	531	4.2		2
3	Aloros (Alorites)	Kypsele	A6	I	532	1.5		3
4	Beroia (Beroiaios)	Veria	A2	I	533	1.3	詳細は本文註参照	4
5	Dion (Diestes)	Dion	B1	P	534	2.1	詳細は本文註参照	5
6	Edessa (Edessaioi)	Edessa	A3	I	535	1.2	詳細は本文註参照	6
7	Europos (Europaioi)	Europos	D3	Am	536	4.1		7
8	Herakleion (Herakleiotai)	Platamon	B7	P	537	2.6		8
9	Ichnai (Ichnaioi)	—	—	V	538	3.2		9
10	Kyrrhos (Kyrrhestes)	Palaioastron	C2	V	539	3.3		10
11	Leibethra (Leibethrioi)	Kanalia	B3	P	540	2.4		11
12	Methone (Methoniaioi)	Eleftherochori	B2	P	541	2.3		12
13	Mieza (Miezaioi/Miezeus)	Kopanos-Lefkadia	A5	I	542	1.4	詳細は本文註参照	13
14	Pella (Pellaioi)	Pella	C1	V	543	3.1	詳細は本文参照	14
15	Pydna (Pydnaioi)	Makrijialos	B4	P	544	2.2		15

*地域については右の略称を使用。I: イマシア、P: ピエリア、V: ヴォティエ、Am: アムファクシティス、Al: アルモビア
主な出典の H & N 2004 no は Hansen & Nielsen 2004 掲載のボリス通し番号、Girtzy no は Girtzy 2001 掲載の都市 ID。

において遺跡が確認されている (表1)。

これらの都市遺跡分布をみれば、幹線道路や各地方を結ぶ道路の交差点など地勢上重要な拠点にあったことが分かる (図1、2)。交易の便宜上、海や湖、河川の近くにて通常緩やかな丘陵斜面に位置することが多い。ただ、都市の防衛上では補強が必要であったとみられ、多くは強固な周壁に囲まれていた。このような都市には、ペラやディオ¹³⁾、コパノス・レフカディア¹⁴⁾がある。一方、交通の要衝にありながら防御的地形に恵まれた都市は、王国に初めておかれた首都アイガイ (Aigeai) であったとされるヴェルギナ、台地上に栄えたヴェリア¹⁵⁾、高低差のある2つの部分からなるエデッサ¹⁶⁾がある。

中央マケドニアの2大都市遺跡における発掘調査の現状

ここでは、上述の中央マケドニア13都市の中から近年発掘調査により構造が明らかになってきたヴェルギナ、ペラの2都市遺跡について、発掘調査の結果と現状を都市構造に焦点を当てつつ報告する。ヴェルギナやペラは時期の違いはあれ首都として王国の重要な都市であり、前者には都市の中心部に特徴的レイアウトが見出され、後者はヘレニズム期に方格状都市計画とみられる構造が存在していたことが明らかになっている。

1. ヴェルギナ

ヴェルギナの都市遺跡は既述のように旧王都アイガイであったとされる¹⁷⁾。ハリアクモン川がピエリア平野とヴェルミオン山地を分かち豊かな平野に注ぎ込む地点から東に6キロメートルのヴェルギナ村と、その東2キロメートルのパラティツィア村の間に位置する (Andronikos 1969: 1; 1994: 12-14)。

ピエリア平野の北側を占めて概ね北東方向を向いた緩やかな斜面上に広がった都市遺跡は、南の都市部と北の墓所部で構成される (図3)。都市部は南側に山地がそびえ南西側は谷に阻まれる形で守られ、北の平原側の方向のみが外部に開け、墓所部が斜面の麓からハリアクモン川に至る平野に展開していた。この守備的地形に加えて、強固な周壁が四方から都市を守っていたとみられる。19世紀後半から調査が始まり、現在はテッサロニキ大学により調査が継続されており、先史期～ローマ期の建築遺構が確認されている¹⁸⁾。

都市部では、南の最も高い地点に周壁に取り囲まれたアクロポリスがつくられていた¹⁹⁾。そのアクロポリスの北、古都市の南西部分に北の平野を見渡せる大規模な台地があり、宮殿と劇場が位置する。劇場は宮殿のすぐ北側の一段低い位置におかれ、その北にはアゴラとエフクリア神殿 (Iero tes Efkleias)、更に北には公共建築物等の遺構が出土している。都市の東側には母神キュベレの神殿 (Mētera twn Thewn Kyvele) があり、そのやや南側にヘレニズム期住宅跡が出土している。

墓所部は、都市部北の、東西およそ3キロメートル、南北2キロメートルの広範囲に広がる。都市部から離れた北側部分は先史時代の円墳墓地、都市部に近い南側部分は比較的新しい時期の墓地が広がる。先史時代円墳墓地の西側に出土し、フィリッポスII世 (Philippos II: 在位前360-336) の墓であると比定され全世界の注目を浴びたのが、メガリ・トゥンバである。この大墳丘の調査は1952年に始まり、墳丘の下に数基の大規模な埋葬建造物が出土した。これらの王墓を含めたマケドニア墓等の埋葬建造物が10数基出土している。

発掘調査を担う、テッサロニキ大学のS. ドゥルーゲ

(Drougou) らによれば、ヴェルギナの古都市には、自然地形を利用する伝統的な古い都市づくりの方法、および、共同体生活における政治・宗教的な必要に応じた独自の工夫が見受けられる。前者については、既述のように古都市の北以外は守備的な自然地形を利用しており、また緩やかな斜面の要所を階段状に削って造成した跡がみられ (Drougou 2001: 550)、後者については、都市の核としての宮殿と劇場、アゴラの三者の結びつきがあるという (Drougou 1989: 13-18; 2000: 519-526; 2001: 549-557)。ドゥルーゲーによれば、公共的性格をもつ三者は同じ南北の中心軸を持ち、古都市の政治的中心として機能していた²⁰⁾。いずれも前4世紀に建造されたが²¹⁾、これらをひとつの複合体と解釈して、最も簡略的な形ではあるが、のちヘレニズム期の小アジアにおける都市ペルガモン (Per-gamon) のアクロポリスなどに見られる政治・宗教的に統合された都市中心体の先駆をなすものであるとみなしている²²⁾。

この複合体に関する解釈は、劇場と宮殿の位置関係についての検討・議論に端を発する。劇場が1982年に宮殿北60メートルの地点にて発見され、調査が開始されてから、研究者間では宮殿との配置上の関連について様々に論議を呼ぶことになった (Drougou 1989: 17)。問題は、劇場が自然の地形を利用せずに不自然なかたちで配置されていたことである。上述のように、ヴェルギナの古都市は主に守備的な自然地形を利用して造形されていたが、劇場については地形を無視し敢えて宮殿のテラス直下に置く形が採られたのは如何なる理由かということである。その解を示唆するのが、既述のような、これら3公共建築物の一体性である。ドゥルーゲーによれば、これは、相互の距離のみならず、これらの間をつなぐ道路の存在により検証される。実際、宮殿・劇場・アゴラを各々結ぶ道路の痕跡が出土している。宮殿の正門から劇場の東側につながる道²³⁾、更に劇場西側からアゴラに通じる道があったという。そして、アゴラの神域には、劇場からの道の他、北の公共建築物と結ぶ道、また西は周壁の門に続く東西軸の道が出土している。また、これら三者には宗教的な一体性もあった。宮殿における父祖ヘラクレスやアゴラにおける女神エフクリアや父神ゼウスなどの信仰が行われた宗教的センターでもあった²⁴⁾。近年、このアゴラにおいて前4世紀末ごろの王族級の若年者のものと判断される埋葬一式が出土しており、その解釈および当エリアの宗教的重要性についての論議を呼んでいる²⁵⁾。

2. ペラ

ペラは、バルカンの内地を源とするアクシオス川が中央マケドニアを南北に縦断して南のテルマイコス湾に注ぐそ

の西岸に位置する。そのテルマイコス湾はペラの南23キロメートルと遙か遠くに臨むが、当時は古都市のすぐ南にルディア (Loudia) 湖と呼ばれた湖水の岸が迫っており、この北岸に、湾へ通じるペラの港が機能していた²⁶⁾。さらに、バルカン半島を横断する街道が古都市を東西に貫いており、ペラは戦略的要衝に位置していたといえる。現在までに明らかになった都市遺跡は、南北2.5キロ、東西が1.5キロであり、総面積はおおよそ400ヘクタールを占める (Akamatis 2004: 11) (図4)。フィリッポスⅡ世やアレクサンドロスⅢ世 (Alexandros Ⅲ: 在位前336-323年) の治世以降、ペラは、現在アルホンティコ (Archontiko) やダミアノ (Damiano)、アグロシキア (Agrosykia) などにその痕跡が残るかつての周辺集落を支配下におき (Chrysostomou, P. 1987: 147-159)、都市域を拡張しつつ繁栄した。古都市部の周辺にあたる東西両端、および南東に墓域が分散して営まれていたとみられる一方²⁷⁾、上述の広大な支配領域にも古墳が分布している。

ペラの古都市において方格状都市計画の存在が判明したのは、1957~1964年の発掘調査においてであった²⁸⁾。1976年に開始された第2期発掘調査は、この都市計画の存在を前提にした発掘計画により実施された。この調査の結果、ペラの都市構造に関して以下のことが明らかになった。

ペラ古都市の方格状都市計画によれば、一造成区画の幅は47メートルで、長さは場所により異なり、当時出土していた部分では²⁹⁾、南から北へ順に長さ125メートルの造成区画が2列、111メートルが1列、再び125メートルが2列、150メートルが1列、再度125メートルが2列並ぶ (図4)。この造成区画の長さの変化の不規則性の理由は不明であるが、M. シガニドゥ (Siganidou) は方格状都市計画の醸し出す単調さを回避するためであると考えている (Siganidou 1986)。

アゴラや神殿など都市の各施設とこの都市計画の関連は、調査の進展により次々に明らかになっている。アゴラは、都市部の中心の10造成区画を占める。アゴラ建造物は東西軸5列の造成区画を全て使用する一方、南北軸は造成区画2列のうち南の造成区画の南の一部を残している。この残された南の部分5つには、小規模な住宅遺構が出土している。アゴラのすぐ北に位置するアフロディテと母神の神殿 (Iero tes Meteras kai twn Thewn kai tes Aphrodites) は、アゴラの東西軸に並ぶ5列の造成区画のうち中央の単位と北に同列であり、その造成区画全てを占める。一方、地神ダロンの神殿 (Iero tou Darrwna) と関連施設も完全に都市計画に組み込まれていた (Lilimbaki-Akamati 2009: 169)。この神殿地域には古典期からの使用の痕跡が見られる。古典期ペラの都市中心地がこの地域で

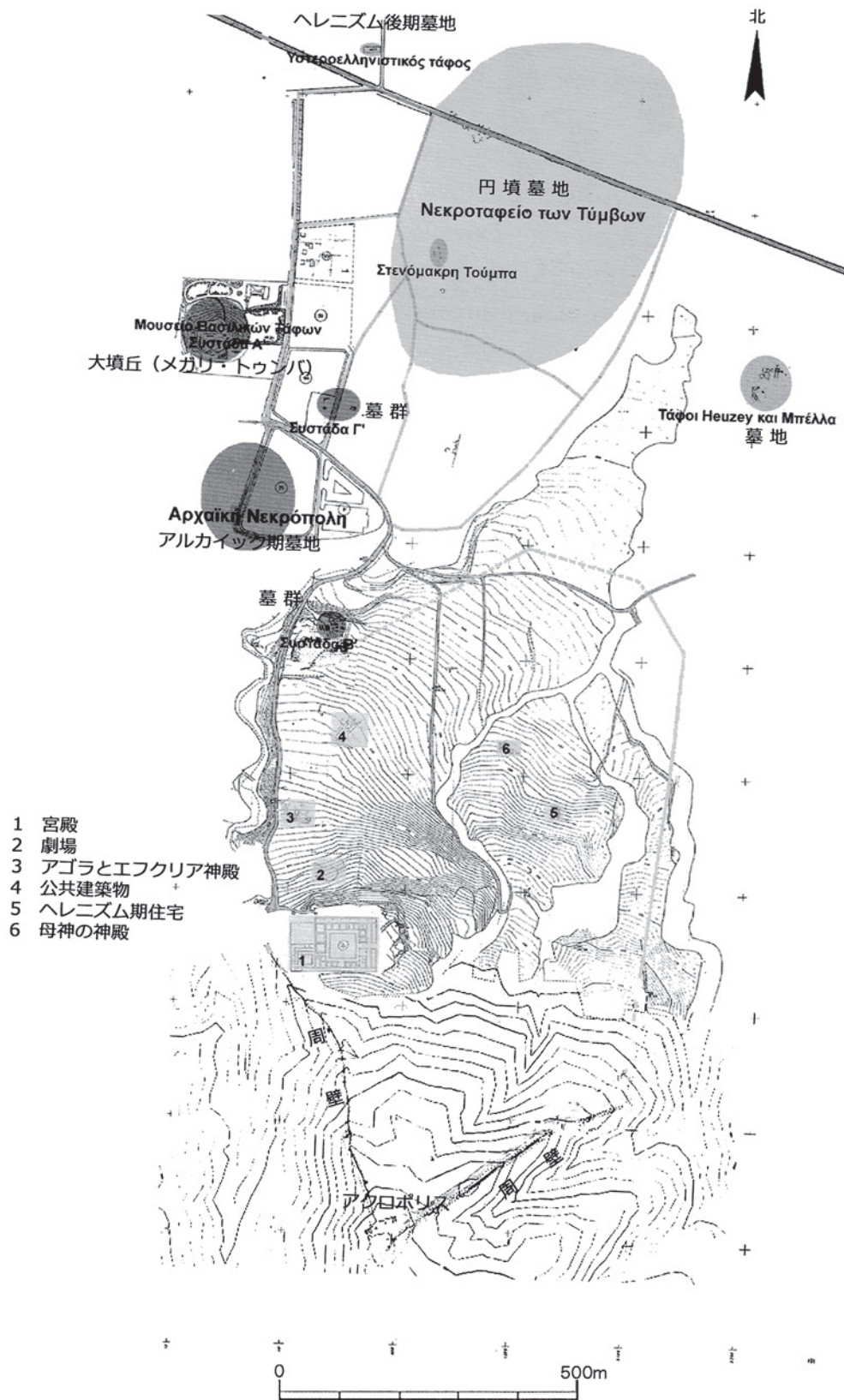


図3 ヴェルギナ都市遺跡図 (Saatsoglou-Paliadele 2009: 296, pl. 1; Kondogoulidou 2007: 143, pl. 1 を合成して著者作成)

あったことは、アゴラ南墓域が古典期に造営・使用されたことなどからも示される。この古典期の中心地の西側を南

北に走る道路は、南の港から出発し、北の王宮方向に届くものと判断されている。

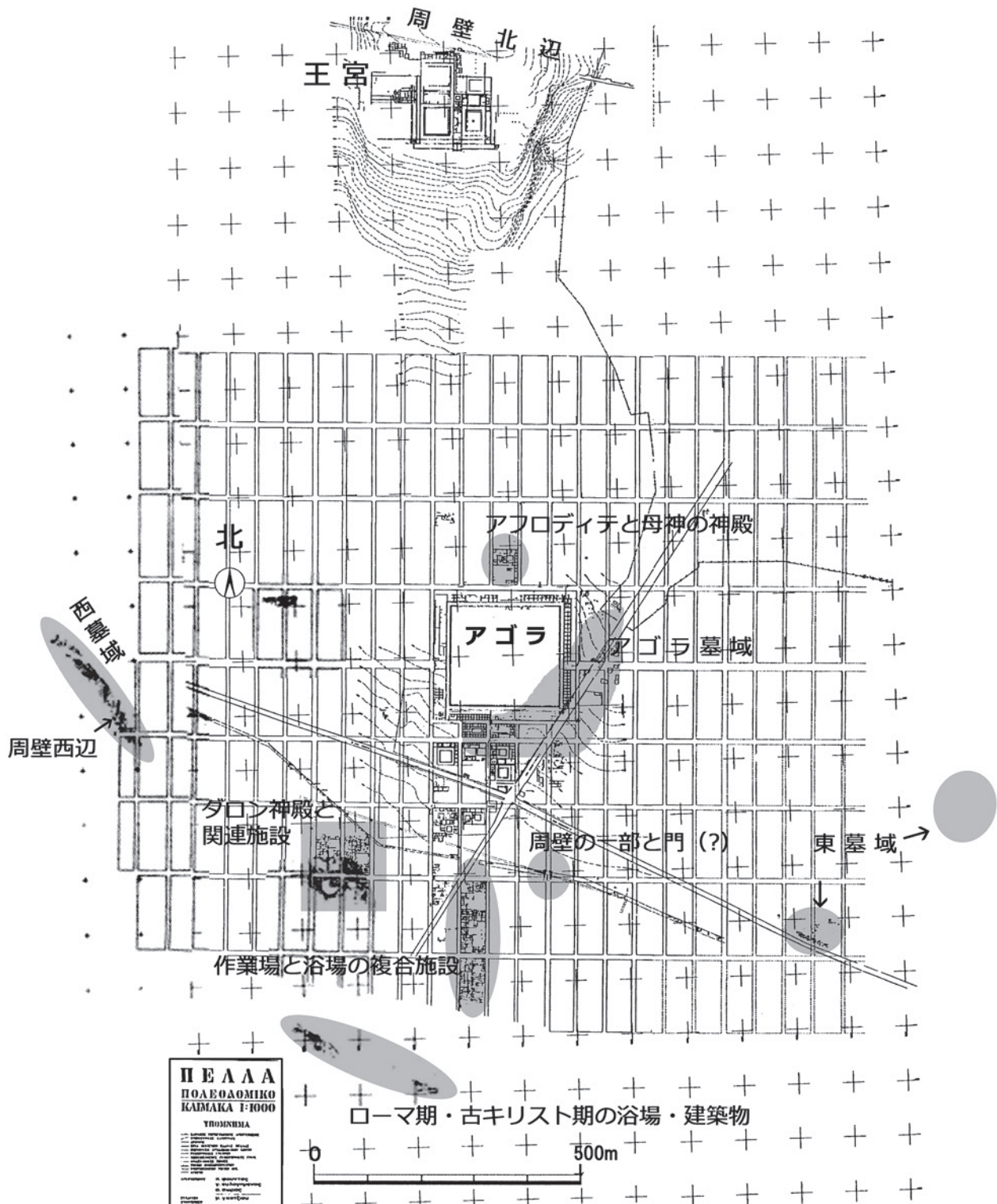


図4 ペラ都市遺跡図 (Chrysostomou 2006: 643, pl. 2; Akamatis 2004: 19, pl. 8 を合成して著者作成)

ペラの都市域に関しては、未だ不明な点が多いが、少なくともヘレニズム期の北壁と西壁の位置は明らかになっており、東辺に関しても、都市の外れにおかれたとされる墓地の存在が確認されており、その位置を示唆している。南

壁については、門と共に出土した壁、及び、ファコス (Phakos)³⁰ との距離が長すぎることから、都市を守るための強化障壁の可能性がある。周壁の南辺はファコス付近の発見が期待されているが、未発見である。また、周壁の

形状が都市計画とは同調していないことから、シガニドゥは周壁と都市計画の建設は別の時期に行なわれたのではないかと述べている (Siganiidou 1986)。

以上の発掘調査結果から、ペラの都市域とその変遷は次のようにまとめられる。

ペラでは先史時代からルディア湖の北岸に集落が営まれていた (Lilimbaki-Akamati 2009: 169)。古代マケドニアの王都がアイガイからペラに遷都された前5世紀末、ペラの古典期の都市の中心はファコスの北北東1キロほどの地点におかれた。この古典期ペラの都市域の北と東の限界線は、ヘレニズム期アゴラの東と南に位置した墓地が示唆している。当初から北の丘陵に坐していた王宮は、この古典期の都市部の周壁から1250メートル離れていた (Akamatis 2004: 31)。この古典期都市の一部は、前4世紀半ば過ぎ頃、火災により焼失する (Lilimbaki-Akamati 2009: 169-171)。同じところに都市は北東方向に拡張し始め、同時に墓地は東方向へ移動し、東墓域の付近に落ち着いた。前4世紀後半、アゴラ建造物が建設され、同世紀末には、モザイク床を擁した大規模な邸宅群が建てられ、ヘレニズム期の新しい都市中心部が形作られる。これらの邸宅群が建てられたアゴラ南側の敷地にはかつて窯などを備えた作業場があり、また、地面も南西方向にやや傾斜があったため、アゴラ東や南東にあった古典期の墓域から土が運ばれ、整地が行われた (Makaronas and Giouri 1989: 5-6)。同じ頃、都市域の周囲に堅固な周壁が巡らされる (Lilimbaki-Akamati 2009: 176-177)。都市の中心地が北東に移動した理由のひとつには、テルマイコス湾の水位が上昇し、ペラ南のルディア湖の岸が迫ってきたということが考えられている (Lilimbaki-Akamati 1992: 134)。都市はローマ支配時代になっても栄えたが、前1世紀初頭に地震により壊滅的な被害を受ける (Akamatis 2004: 13)。ヘレニズム期都市中心地であるアゴラでは修復の痕跡もみられるが、衰退していった (Lilimbaki-Akamati 2005: 478)。ただし、都市は完全に放棄されたのではなく、都市部南には引き続き運営されたローマ期公衆浴場や工房の痕跡がみられ古キリスト期までの存続が認められ (Lilimbaki-Akamati 2006: 609-611)、またファコス付近では、ビザンツ期に至るまでの居住跡が出土しており、活発な交易活動が行われたとみられる (Lilimbaki-Akamati 2009: 174)。また、ヘレニズム期ペラの西にはローマ期ペラの集落が新たに建てられたとみられる (Lilimbaki-Akamati 2005)。

4. 評価と展望

以上のような考古学調査の経過を辿っている中央マケドニア古代都市であるが、筆者は、これらの結果を次の2つの観点から古代ギリシア研究のなかに位置づけて、今後の

展望を提示したい。

古典期ギリシア都市（ポリス）と比較した古代マケドニア都市の特徴

第一に、ギリシア人一派を自称しつつ伝統的な部族制を基にした王政を堅持し続けたマケドニア人らが如何なる特徴をもつ都市を作り上げたか、という観点を示す。市民の結びつきに基礎を置き市民が直接に都市と深い関係を持った南部ギリシアとは異なる都市の在り方があったのではなかいか。

そもそも、ギリシア都市（ポリス）は、アルカイック期・古典期ポリスとヘレニズム期以降のそれとは明確に異なった性格を示す (Hansen and Nielsen 2004: 10)。それは都市遺跡により再現されるポリスの光景に明確に表れている。前5～4世紀のポリスと異なり、前1世紀のポリスでは、周壁に関心が払われず、都市中心部には為政者の居所、記念碑化された政治的公共建築物などが見られ、古典的ポリスの姿からかけ離れたものとなった。その画期となったのが、フィリッポスの南部ギリシア制覇とそれに続くアレクサンドロスの東征であり、大王と後継者らが中東に建設した約300の都市はギリシア・ポリスの様相を大きく変貌させた (Hansen and Nielsen 2004: 10-11)。一方、本稿で報告したように、マケドニア内地には、古くは前6世紀に遡る古代都市遺跡が存在する。南部の古典期ギリシア都市³¹⁾との比較を通じて、これらのマケドニア都市としての特徴を見出すことは、ヘレニズム期都市との関連をも議論することにも繋がる。このような観点からみれば、本稿で報告したヴェルギナの都市中心部を形作る特徴的レイアウトやペラの方格状都市計画の存在は示唆に富むといえる。

マケドニア都市と植民活動の関連

第二に、マケドニア都市がその発生以来、植民活動とどういう関連を持ってきたか、という観点を提示したい³²⁾。マケドニア王による植民（移民）は古くは前5世紀前半に見られるが³³⁾、都市建設に伴った政策として本格化したのはフィリッポスⅡ世の頃であり、王は王国の人口基盤を安定増強させるために移住政策を採り、西マケドニアを征服した際、中央および西マケドニア内から移住させ都市をつくらせた³⁴⁾。この政策は、後に王国が異民族を次々に取り込んでいく過程で功を奏し、王国を発展に導くこととなった³⁵⁾。アレクサンドロスとその後継者らが外地に多くの都市を建設した一方、フィリッポス以降に再びマケドニア内地に都市を建てたのは、カッサンドロス (Kassandros: 在位305?～297) が最初であり³⁶⁾、デメトリオス (Demetrios Poliorketes: 在位前294～287) やリュシマコス (Ly-

simachos：在位前 287～285？）らも自らの名を冠した都市を建設した³⁷⁾。考古学的物証を歴代諸王の政策と直接結び付けることは困難を伴うが、マケドニア都市遺跡研究にてマケドニア内地で行われた都市建設と植民（移民）がどのように関わってきたか、という観点を持つことは、ヘレニズム都市研究との関連において重要であると考ええる。

5. おわりに

古代マケドニア研究における考古学調査の重要性はヴェルギナの大墳丘の発見が語るところである。そして、本稿で取り上げた都市遺跡の様相を見れば、ギリシア領マケドニアにはギリシア都市研究についても期待に応えられるだけの埋蔵文化財が存在することがわかる。何世紀も前から欧米人らの手により考古学調査が続けられてきた南部と異なり、北部の辿った激動の近現代史が近代以降の文化財乱伐を阻み、漸く 20 世紀後半からの学術的発掘調査を許しているのである。2013 年 2 月の現時点において、EU を巻き込む経済不振からの出口も見えぬ中ではあるが、ギリシア人の手による発掘調査は弛みなく地道に行われている。本稿で対象とした中央マケドニアのみならず、西マケドニアにも多くの集落・都市遺跡の分布が確認され、交通の要衝には山の斜面を巧妙に利用した山岳都市の存在が報告されており、一方東マケドニアには南部ギリシアの植民諸都市のほかフィリッポス以降の新しいマケドニア都市遺跡の発掘調査が進行している。これらの報告については稿を改めたい。

凡例

- 1) 原語の転写と語句：名詞に関して以下の留意点を示す。なお、ギリシア語に関しては慣用化しているもののみを古典語読みで、研究上の用語や研究者名及び地名などは現代語読みとした。
【固有名詞】慣用語はカタカナのみで記した。それ以外に関し、研究上の用語、人名、地名についてはカタカナに転記しその後の（ ）内に原語をラテンアルファベットで記した。ただし、註釈内で原語がギリシア語の場合にはギリシア語アルファベットを使用している。なお、人名には、必要に応じて存命あるいは在位期間を記した。
【一般名詞】適宜邦訳し、場合によってはカタカナに転記し（ ）内あるいは註釈に原語と若干の説明を加えた。
- 2) 文献：ギリシア語文献についてはラテンアルファベットによる略語を付した。

註

- 1) 本稿では、ローマ侵略直前のアンティゴノス朝（Αντιγονίδεις：前 277～168）の領域を、マケドニア人が王統アルゲアダイ（Αργεάδαι）以来最後までヨーロッパ本土に保持し続けた本拠地として扱う。このマケドニアの内地というべき地はほぼギリシア領マケドニアと重なり、中央（Κεντρική Μακεδονία）、西（Δυτική）、東（Ανατολική）の 3 地域に分割される。（Borza 1990: 30）

- 2) ハリアクモン（Αλιάκμων）川流域の広大な平野およびピエリア（Πιερία）山地、テルマイコス（Θερμαϊκός）湾沿岸、アクシオス（Αξιός）川流域の低地部分、更にテッサロニキ（Θεσσαλονίκη）の山地部分周辺までを含んだ地域。低地が広がる地域であることから、下、あるいは低地マケドニア（Κάτω Μακεδονία）とも呼ばれる（Borza 1990: 30）。ただ、テッサロニキ付近はミグドニア（Μυγδονία）として、東マケドニアに入ることもある（後註 9）参照。Cf. Girtzy 2001。
- 3) 北部ギリシアのマケドニア地方における考古学調査全般については、松尾 2008a 参照。
- 4) 後註 8）参照。
- 5) マケドニアに関連する古文獻の言及については、松尾 2008a：174 参照。
- 6) ガリコス（Γαλλικός）川（古代のエヘドロス（Εχέδωρος）川）からストウリュモン（Στρυμόν）川流域を経てネストス（Νέστος）川までに至る広大な地域である。ストウリュモン川とその支流の潤す地域と古都市フィリッピヤカバラ（Καβάλα）周辺、パンゲオン（Παγγαίον）山を含み、その境界として北にはロドピ（Ροδόπη）山脈がそびえ、南にはエーゲ海が広がる。（Borza 1990: 30）
- 7) 西端のピンドス（Πίνδος）山脈方面に広がった、ハリアクモン河の中及び上流域にあたるイマシア（Ημαθία）平野の西及び南西部の山岳地帯にあたる。全体として山がちであることから、上、あるいは高地マケドニア（Ανω Μακεδονία）とも呼ばれる。（Borza 1990: 30）
- 8) 縦横に走る直線道路により方形の造成区画が碁盤目状に並ぶ都市計画（Wycheley 1962: 16-18）。別名ヒッポダモス式都市計画（Ιπποδάμειο σύστημα）と呼ばれ、前 5 世紀に小アジアのイオニア系都市ミレトス（Μίλητος）出身のヒッポダモス（Ιππόδαμος）により発明されたといわれる。ただし、単純なプランの規則的な都市計画は既に前 8 世紀末ごろからミレトスや古スミルナ（Σμύρνη）、メガラ・ヒュブライア（Μέγαλα Υβλαία）などで使用されていたことが考古学的にも明らかになっている（オーウェンズ 1992：63）。方格状都市計画は、アルカイック期、古典期を経て発展し、ヘレニズム期にはより統合された形で地中海世界に広まった。
- 9) マケドニアの 3 地域は、古典文献に著されたマケドニア支配以前の古民族の名を冠した小区域に分割される。これらの小区域は以下の通り。中央マケドニア：イマシア、ピエリア、ヴォティエア（Βοττιαία）、アムファクシティス（Αμφαξιτίς）、アルモピア（Αλμωπία）。西マケドニア：エオルデア（Εορδαία）、オレスティス（Ορεστίς）、エリメイア（Ελίμεια）、リングス（Λύγκος）。東マケドニア：ミグドニア、クリストニア（Κρηστωνία）、ヴィサルティア（Βισαλτία）、オドマンティキ（Οδομαντική）、シンティキ（Σιντική）。1990 年代以降の地域研究で対象となったのは、北ヴォティエア、ヴェリア付近、フロリナ（Φλώρινα）付近、西マケドニア、テッサロニキ北西部地域、テルマイコス湾沿岸地域、ミグドニア・ヴィサルティアなど。各々の調査報告については、松尾 2008b：82 参照。
- 10) 松尾 2008b に、中央マケドニアの集落・都市遺跡のリスト、及び、遺跡に関する 2003 年までの参考文献を掲載。リストは Girtzy 2001 を基礎とした。なお、本稿図 2 に示した都市・集落遺跡番号は中央マケドニア内の地域（前註参照）ごとに頭文字（アルファベット）を付し、また各地域内では、2003 年時点で遺跡の規模の大きなもの、または古代都市名あるいは集落名が明らかなものから優先的に番号を振った。

- 11) 中央及び西マケドニア。
- 12) Hansen and Nielsen 2004: 794-809 参照。
- 13) ディオンは、テッサリア (Θεσσαλία) からマケドニアの地に入る軍事上の要衝に位置し、広大な神域を擁する宗教都市であった。都市遺跡は、オリュンポスの北東山麓の平野部の緩い傾斜地に広がる。古都市は、周壁に囲まれた方形の都市部、及び、周壁外の都市南部に広がる神域部、そして都市部北西側に広がる墓所部に大別できる。都市部は東側の湿地帯と南側の濠以外は無防備な環境であったため、少なくともヘレニズム期以降に堅固な周壁にて防備された。同時に、周壁内の市街地は直線道路が交差する方格状都市計画が適用されたとみられる。同都市遺跡全般については、Pandermalis 1996; 1997; Touratsoglou 1997: 250-269 参照。また、同遺跡の周壁については Stephanidou-Tiveriou 1998 を参照。同遺跡周辺の地理環境や位置、領域等についても包括的に論じている。
- 14) コパノス・レフカディアは、古代マケドニアの重要な古都市のひとつミエザ (Μιέζα) と同定されている。都市遺跡はヴェルミオン (Βέρμιον) 山麓に位置し、現在のコパノス村、レフカディア村、及びナウッサ (Νάουσα) 町の間の広範囲に広がる。遺跡の大部分はナウッサ台地から東に緩やかに下った低地に集中している。主な建築遺構は、周壁・アクロポリス、アゴラ、劇場、邸宅、墓所 (古墳含む) などであるが、特筆すべきは、マケドニアの王族・貴族の子弟が学んだアリストテレス学校址が出土していることである。同都市遺跡全般については、Romipoulou 1997 を参照。発掘調査は現在も継続中であり、近年の調査報告は、Allamani et al. 2009 を参照。
- 15) ヴェリアは、アンティゴノス一族の故郷であったことからヘレニズム後期にはペラに次ぐ第2の都市として繁栄した。ヴェルミオン山地東麓の台地上に営まれる同名の都市の街並みの下に都市遺跡が確認されている。急流と崖が自然の防壁となり、これに加え、ヘレニズム期建造とみられる堅固な周壁が都市を取り囲んでいた。周壁内中心部にヘレニズム期公共建築物遺構が出土しており、その中に古典期～ヘレニズム期のアゴラと判断される遺構が存在する。調査報告は、Tataki 1988; Hatzopoulos 1990; Brocas-Deflassieux 1999 を参照。
- 16) エデッサは、中央マケドニアの北西、平原部と山地部を結ぶ要衝に位置する。古都市は、自然地形に従い、段差を持った2つの部分、アノ・ポリ (Ανω πόλη: 上市) とカト・ポリ (Κάτω πόλη: 下市) で構成される都市部、その周囲に広がる墓所部からなる。都市部全体は一つの周壁により上下一体となって守られていたとみられ、段差の一部に滝が見られる。都市遺跡全般については、Chrysostomou, A. 1987; 1996 を参照。近年の調査結果については、Chrysostomou 2009 において時代別に整理して報告されている。
- 17) 同都市遺跡をアイガイと同定したのは英国人 N. G. L. ハモンドであり (1968年)、その大墳丘 (メガリ・トゥンパ: Μεγάλη Τούμπα) の発見以降、M. アンドロニコス (Ανδρόνικος) の発掘調査により徐々に考古学的な実証がなされることとなり、現在まで多くの研究者の支持を得ている (Borza 1990: 287-288. Cf. Hammond 1991: 31)。その一方で、若干数の研究者がこれに異を唱えており、1990年代半ば頃にも一時論争が再燃した (Faklaris 1994: 609-616; Saatsoglou-Paliadeli 1996: 225-236)。ヴェルギナの都市遺跡同定問題全般については、Drougou and Saatsoglou-Paliadeli 1999: 12-16 参照。
- 18) ヴェルギナの都市遺跡全般については、Drougou and Saatsoglou-Paliadeli 1999; Drougou 2001 を参照。更に、Drougou 2009 では近年の調査結果を報告しつつ都市の末期の状態を考察している。
- 19) 周壁の発掘調査は、1980年にM. アンドロニコスにより開始され、現在はテッサロニキ大学のP. ファクラリス (Φάκλαρης) により継続されている。アクロポリスも含めた調査結果報告については、Faklaris 1993: 391-396; 1996: 69-74 を参照。
- 20) ただしドゥルーゲーは、三者の一体性は王宮・劇場がより密接であり、アゴラとの結びつきは比較的緩いものと見ている。1989年に劇場西40メートルの地点に出土した前4世紀末建造の壁の一部は、劇場とアゴラを隔てる障壁と解釈されている。Drougou 1989: 13-17 を参照。
- 21) 宮殿の建造時期は前4世紀第3四半期と推定され、前3世紀前半に増築されたとみられる。劇場の時期は前4世紀ごろとされ、宮殿とは、石の研磨方式や排水路の形などに見られる建築方法の類似性からもその関連が検証されうる。アゴラ (エフクリア神殿含む) の時期は3期に分けられ、第1期は前4世紀、第2期は前3～2世紀前半、第3期はローマ期である。
- 22) Drougou 1989: 17 参照。記念碑化されたヘレニズム都市の代表としてのペルガモンでは、巨大な擁壁により支えられた劇場を中心に政治・宗教的公共建築物が段状に巧みに積み上げられ、壮大な統一体を作り上げていた。(Wycherley 1967: 27-28)
- 23) ドゥルーゲーは、宮殿と劇場の間にストア (列柱廊) の存在を推定し、この道はこのストアを経由していたとしている。このストアが存在していたという仮説は、宮殿と劇場の位置と高さの比率から導かれた。劇場建築物の高さは6.61メートルであるが、宮殿北側のテラスの高さが宮殿建築物基礎部から6.52メートルとほぼ同じで、その間の高さが11.35メートルを測る為、両者の間にもうひとつの建築物があったのではないかと推定に至り、関連を探る研究が進めている。Drougou 2000: 519-526 参照。
- 24) Drougou 2001: 552 参照 (特に、同頁註14に同地域の宗教性を示す遺物について言及)。
- 25) 2008年の調査において、方格状土壙 (8.05メートル×8.55メートル、深さ1.5メートル) が出土し、その一角に金製ピクシス (πυξίς) が収納された青銅器が発見された。ピクシスの中には火葬遺灰と金製頭飾りが収められており、この埋葬方法は火葬に覆われた「王子の墓」のそれと類似しており、被葬者は王族級の人物であるとみられている。遺灰の分析によれば、被葬者は15～18歳の男性と判断され、アレクサンドロス III 世の2人の子息の悲劇的暗殺を述べた古文書の記述との関連が考えられる。いずれにせよ、都市の北にある墓所ではなく、都市中心部に単独で埋葬されていたということについて論議を呼んでいる。(Saatsoglou-Paliadeli 2009)
- 26) Akamatis 2004: 13 参照。このルディア湖は1930年代に干拓され、現在では広大な耕地となっている。
- 27) 古都市周辺の墓域には、アゴラ墓域、東墓域、西墓域があり、古典期～ローマ期の墓地が出土している。(墓域名称は筆者による。) 当時、墓は都市の外につくられる傾向があり、都市域の変遷は都市周辺墓域の移動と深く関連している。後述。
- 28) ペラの方格状都市計画については、Siganidou 1986; Lilimbaki-Akamati 1992 参照。
- 29) 2006年時点では、ここに記述してある部分の更に南に造成区画一列が確認されているが南北長は不明である。(図4)
- 30) ペラの都市部南に広がっていたルディア湖に突出していた小さな岬状の土地。古文書の記述によれば、周壁が巡って城塞が形作られており、そのレンズ状の形状からファコス (Φάκος) と呼ばれ、都市ペラの「王の宝庫」があったという (Lilimbaki-Aka-

- mati 2005: 465-466)。ルディア湖は近代に干拓され現在は広大な耕地となっているが、その一画にこのファコスと認められる部分が見つっている。近年に行なわれた発掘調査では、先史〜ビザンツ期の包含層が確認され、建築遺構も出土している。
- 31) マケドニア沿岸部一帯、特にハルキディキ半島には、南部ギリシアの植民都市が早くから存在しており、内陸のマケドニア都市との比較研究が可能である。ただし、先住民の集住や移住、またマケドニア人との関わりを考慮する必要があることは言うまでもない。例えば、オリュントスはハルキディキ半島の他の植民都市から移民・集住させる形で前432年に建設され、その際にペルディッカスⅡ世 (Perdikas II: 在位前452-413) の援助があったという (Lilimbaki-Akamati 1999: 27)。
- 32) 古代ギリシア・ローマ研究で使用される「植民」という言葉は様々な含義があり、近年では、検討・再考が求められている場合も多い (Hansen and Nielsen 2004: 150-153)。特に、ギリシアの「植民都市」という場合、原語 ἀποικία は home away from home という意を持ち、ローマの植民都市 Colonia や 19、20 世紀の西欧の帝国主義の色合いが濃い Colony とは概念が異なる (Hansen and Nielsen 2004: 150; Wilson 2006: 28-29)。ハンセンらによると、ギリシアの場合、「植民都市」というより「移民コミュニティ (Emigrant community)」との表現がふさわしい (Hansen and Nielsen 2004: 150)。実際、従来考えられてきた定型的なギリシア植民都市とは異なったあり方、例えば現地の非ギリシア人の居住地がギリシア化されて形成されたコミュニティ、ポリス主導の植民活動ではなく個々のギリシア人による漸次的な移入によるコミュニティ形成、などが多く認められている (Hansen and Nielsen 2004: 151)。マケドニアについては王が主体となった政策としての植民 (あるいは移民) を考慮しながらギリシア全体の「植民都市」の概念をも常に再考・検討しつつ見ていく必要がある。
- 33) マケドニア外部 (主に南部ギリシア) から移住民を受け入れた次のような例がある。アレクサンドロスⅠ世 (Alexandros I: 在位前495~452) が、アルゴスから侵略されたミュケナイ避難民を受け入れた。またペルディッカスⅡ世は3000人の南部ギリシア人を受け入れたという。ただしこれらは次に述べるフィリッポスⅡ世以降の「移民」政策とは性格が異なる。(Edson 1980: 24)
- 34) F. ウエルタ (Huerta) によれば、フィリッポスが都市整備の政治・経済的意味を理解した初めてのマケドニア王であるという。(Huerta 1996: 26)
- 35) 王国・征服地間の人口操作及び移動により異民族の教化や同化が容易になった。(Edson 1980: 24) 更に、フィリッポスとアレクサンドロスⅢ世は移住民を軍事補強要員として使った。王国内地から辺境の都市へ送られたマケドニア人移住民は、イリュリア人 (Ιλλυριοί) やソグディアナ人 (Σογδιανοί) など周辺異民族に対峙するため防衛の役割を与えられた。これらの移住民と現地民との子息に軍事教育を施し、マケドニア兵へ育て上げ王国軍に加えて増強をはかった。王らにとり移民は王国の権力と経済力をふるう為の軍事力を温存する基本的政策であったといえる。(Huerta 1996: 80-82)
- 36) 政治・軍事的な目的で、東マケドニアにテッサロニキやカッサンドレイア (Κασσάνδρεια) などの都市を建設し、その他の既存の都市の改編・修築にも関与した。このほか、南部ギリシアでも、アレクサンドロスⅢ世により破壊されたテーバイ (Θήβες) の再建や、ストラトス (Στράτος)、サウリア (Σαυρία)、アグリニオン (Αγρίνιον) 等の集住を行なった。(Stephanidou-Tiveriou 1996: 1066; Mikrogiannakis 1977: 235)
- 37) マケドニア内地からやや外れるが、ギリシア本土に、ディミトリアス (Δημητριάς)、リュシマケイア (Λυσιμάχεια) などを建設した (Hammond and Walbank 1988: 243, 256)。

参考文献

- Akamatis 2004: Ακαμάτης, Ι. Μ. 2004 *Πέλλα και η περιοχή της*. Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων.
- Allamani et al. 2009: Αλλαμανή, Β., Α. Κουκουβού, Ε. Ψαρρά 2009 *Μίεζα, πόλη Ημαθίας. Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 20 Χρόνια, Επετειακός τόμος: 17-30.
- Andronikos 1969: Ανδρόνικος, Μ. 1969 *Βεργίνα 2, το νεκροταφείο των Τυμβών*. Εν Αθήναις, Αρχαιολογική Εταιρεία.
- Andronikos 1994: Ανδρόνικος, Μ. 1994 *Βεργίνα ΙΙ. Ο τάφος της Περσεφόνης*. Εν Αθήναις, Αρχαιολογική Εταιρεία.
- Borza, E. N. 1990 *In the Shadow of Olympus: The Emergence of Macedonia*. Princeton, Princeton University Press.
- Brocas-Deflassieux, L. 1999 *Beroia, cite de Macedoine -Etude de Topographie Antique*. Beroia, Centre de recherches de l'Antiquite grecque et romaine, Annexe de Beroia; Municipalite de Beroia.
- Chrysostomou, A. 1987: Χρυσοστόμου, Α. 1988 *Το τείχος της Έδεσσας Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 1 (1987): 161-172.
- Chrysostomou, A. 1996: Χρυσοστόμου, Α. 1997 *Η Έδεσσα στα προχριστιανικά χρόνια. Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 10^Α (1996): 161-172.
- Chrysostomou, A. 2009: Χρυσοστόμου, Α. 2009 *Αρχαία Έδεσσα: η εξωαστική χρήση του χώρου. Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 20 Χρόνια, Επετειακός τόμος: 463-476.
- Chrysostomou, P. 1987: Χρυσοστόμου, Π. 1987 *Νέοι τύμβοι στην Πελλαια χώρα. Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 1: 147-159.
- Chrysostomou, P. 2006: Χρυσοστόμου, Π. 2006 *Σωστική ανασκαφή στο δυτικό νεκροταφείο της Πέλλας κατά το 2006: οι ελληνιστικοί τάφοι. Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 20: 641-657.
- Drougou 1989: Δρούγου, Στ. 1992 *Το αρχαίο θέατρο της Βεργίνας και ο περιβάλλον χώρος του. Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 3 (1989): 13-23.
- Drougou 2000: Δρούγου, Στ. 2000 *Βεργίνα 2000: το αρχαίο θέατρο. Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 14: 519-526.
- Drougou 2001: Δρούγου, Στ. 2003 *Βεργίνα 2001 - Minimalia. Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 15 (2001): 549-557.
- Drougou 2009: Δρούγου, Στ. 2009 *Βεργίνα -Η εικόνα του τέλους της πόλης των Αιγών: πρώτες σημειώσεις από μια νέα ανασκαφική απόπειρα. Εγνατία* 13: 121-132.
- Drougou and Saatsoglou-Paliadeli 1999: Δρούγου, Στ. και Χρ. Σαατσόγλου-Παλιαδέλη 1999 *Βεργίνα - Περιδιαβάζοντας τον αρχαιολογικό χώρο*. Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απαλλοτριώσεων.
- Edson, C. 1980 *Early Macedonia*. In M. B. Hatzopoulos and L. D. Loukopoulou (Eds.) *Philip of Macedon*, 10-35. Athens, Aristide D Caratzas Pub.
- Faklaris 1993: Φάκλαρης, Π. Β. 1993 *Ο οχυρωματικός περίβολος και η ακρόπολη της Βεργίνας. Τα πρώτα ανασκαφικά δεδομένα Αρχαία Μακεδονία* V, τόμος 1, Θεσσαλονίκη: 391-403.
- Faklaris, P. B. 1994 *Aegae: Determining the Site of the First Capital of Macedonians*. *American Journal of Archaeology* 98: 609-616.
- Faklaris 1996: Φάκλαρης, Π. 1997 *Βεργίνα. Ο οχυρωματικός περίβολος και*

- η ακρόπολη. *To Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 10^Α (1996): 69-78.
- Girtzy, M. 2001 *Historical topography of ancient Macedonia*. Thessaloniki, University Studio Press.
- Hammond, N. G. L. 1972 *A History of Macedonia, Historical Geography and Prehistory* vol. 1 Oxford, Clarendon Press.
- Hammond, N. G. L. 1991 *The Miracle that was Macedonia*. London, Sidgwick and Jackson.
- Hammond, N. G. L. and G. T. Griffith 1979 *A History of Macedonia 550-336 BC.*, vol.2, Oxford Clarendon Press: Oxford University Press.
- Hammond, N. G. L. and F. W. Walbank 1988 *A History of Macedonia*, vol. III 336-167B. C. Oxford Clarendon Press: Oxford University Press.
- Hansen, M. H. and T. H. Nielsen 2004 *An Inventory of Archaic and Classical Poleis: An Investigation Conducted by The Copenhagen Polis Centre for the Danish National Research Foundation*. Oxford, Oxford University Press.
- Hatzopoulos 1990: Χατζόπουλος, Μ.Β. 1990 Χώρα και κόμεις της Βέροιας. Στο *Μνήμη Δ. Λαζαρίδη - πόλεις και χώρα στην αρχαία Μακεδονία και Θράκη*, 57-68. Θεσσαλονίκη, ΥΠΠΟ, Αρχαιολογικό Μουσείο Καβάλας: Ecole Francaise d'Athenes.
- Hatzopoulos, M. B. and L. Loukopoulou 1987 *ΜΕΛΕΤΗΜΑΤΑ 3 -Two Studies in Ancient Macedonia Topography-*. Athens.
- Heuzey L. et H. Daumet 1876 *Mission archéologique de Macédoine* Paris, Librairie de Frim-Didot.
- Huerta, F. Jr. 1996 *The cities of Philip and Alexander: Early Macedonian Colonization*. California, California State Univ.
- Kahrstedt, U. 1953 Städte in Makedonien. *Hermes* 81: 85-111.
- Kondogoulidou 2007: Κοντογουλίδου, Ε. 2011 Σωστική ανασκαφή στην αρχαϊκή νεκρόπολη των Αιγών 2007. *To Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 21 2007: 143-148.
- Lilimbaki-Akamati 1992: Λιλιμπάκη-Ακαμάτη, Μ. 1995 Από την τοπογραφία και τα νεκροταφεία της Πέλλας. *To Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 6 (1992) 127-136.
- Lilimbaki-Akamati 1999: Λιλιμπάκη-Ακαμάτη, Μ. 1999 Μακεδονικές πόλεις. Στο *Αλέξανδρος ο Μέγας: από τη Μακεδονία οικουμένη (Βέροια 27-31/5/1998)*, 23-35. Βέροια, Νομαρχιακή Αυτοδιοίκηση Ημαθίας.
- Lilimbaki-Akamati 2005: Λιλιμπάκη-Ακαμάτη, Μ. 2005 Ανασκαφική έρευνα στην περιοχή του Φάκου της Πέλλας. *To Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 17 (2003): 465-484.
- Lilimbaki-Akamati 2006: Λιλιμπάκη-Ακαμάτη, Μ. 2006 Ανασκαφική έρευνα στην Πέλλα το 2006. *To Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 20: 591-614.
- Lilimbaki-Akamati 2009: Λιλιμπάκη-Ακαμάτη, Μ. 2009 Το αρχαιολογικό έργο στην Πέλλα, 1987-2007. *To Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 20 Χρόνια, Επετειακός τόμος: 169-184.
- Makaronas and Giouri 1989: Μακαρόνας, Χ. και Ε. Γιούρη 1989 *Οι οικίες της αρπαγής της Ελένης και του Διονύσου της Πέλλας*. Αθήναι, Αρχαιολογική Εταιρεία.
- Mikrogiannaki 1977: Μικρογιαννάκη, Εμμ. 1977 Το πολιτιστικόν έργον του Κασσάνδρου. *Αρχαία Μακεδονία* II: 225-236.
- Pandermalis 1996: Παντερμαλής, Δ. 1997 Δίον - Η δεκαετία των ανασκαφών 1987-1997. *To Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 10^Α (1996): 205-214.
- Pandermalis 1997: Παντερμαλής, Δ. 1997 *Δίον: αρχαιολογικός χώρος και μουσεία*. Αθήνα, Εκδόσεις Αδαμ.
- Papazoglou, F. 1988 Les villes de Macedoine à l'époque romaine. *Bulletin de correspondance hellénique*, Suppl.16.
- Romiopoulou 1997: Ρωμιοπούλου, Κ. 1997 *Λευκάδια-αρχαία Μιέζα*. Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απαλλοτριώσεων.
- Saatsoglou-Paliadeli, Chr. 1996 Aegae - Reconsideration. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Athenische Abteilung* 111: 225-236
- Saatsoglou-Paliadeli 2009: Σαατσόγλου-Παλιαδέλη, Χ. 2009 Βεργίνα 1977/87-2006. *To Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 20 Χρόνια, Επετειακός τόμος: 295-306.
- Samsaris 1973: Σαμσάρης, Δ. 1973 *Ιστορική Γεωγραφία της Ανατολικής Μακεδονίας κατά την Αρχαιότητα*. Θεσσαλονίκη, Εταιρεία Μακεδονικών Σπουδών.
- Siganidou 1986: Σιγανίδου, Μ. 1986 Πολεοδομικά θέματα της αρχαίας Πέλλας. Στο *Μνήμη Δ. Λαζαρίδη. Καβάλα 9-11 Μαΐου 1986*, 167-174. Θεσσαλονίκη, ΥΠΠΟ, Αρχαιολογικό Μουσείο Καβάλας: Ecole Francaise d'Athenes.
- Siganidou 1988: Σιγανίδου, Μ. 1988 Τα αστικά κέντρα στη Μακεδονία. Στο *Αρχαία Μακεδονία, κατάλογος έκθεσης στην Αυστραλία*, 36-37. Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού.
- Stephanidou-Tiveriou 1996: Στεφανίδου-Τιβεριού, Θ. 1999 Δίον και Άλος: δύο νέα κτίσματα της εποχής Κασσάνδρου. *Αρχαία Μακεδονία* 6 (1996): 1065-1074.
- Stephanidou-Tiveriou 1998: Στεφανίδου-Τιβεριού, Θ. 1998 *Ανασκαφή Δίου: τόμος Ι, η οχύρωση* Θεσσαλονίκη, Αρχαιολογικά Εργαστήρια Δίου.
- Tataki, A. B. 1988 *ΜΕΛΕΤΗΜΑΤΑ 8 -Ancient Beroea Prosopography and Society-* Athens, Κέντρον Ελληνικής και Ρωμαϊκής Αρχαιότητας, Εθνικόν Ίδρυμα Ερευνών.
- Touratsoglou 1997: Τουράτσόγλου Ι. 1997 *Μακεδονία. Ιστορία-Μνημεία-Μουσεία* Αθήνα, Εκδοτική Αθηνών.
- Wycherley, R. E. 1962 *How the Greeks Built Cities: The relationship of architecture and town planning to everyday life in ancient Greece*. New York, W. W. Norton and Company Inc.
- Wilson, J. P. 2006 'Ideologies' of Greek colonization. In G. Bradley and J. P. Wilson (Eds.) *Greek and Roman Colonization: Oridins, Ideologies and Interactions*, 25-57. Swansea, The Classical Press of Wales.
- E. J. オウエンズ (著)、松原國師 (訳) 1992 『古代ギリシア・ローマの都市』東京：国文社。(原版 Owens, E. J. 1991 *The City in the Greek and Roman World* Routledge.)
- 松尾登史子 2008a 「マケドニア考古学の成立と展開」『西アジア考古学』第9号 171-182頁。
- 松尾登史子 2008b 「古代マケドニア関連都市及び集落遺跡の分布—発掘調査の現状(1)」『人類史研究』第14号 79-95頁。

松尾 登史子
九州共立大学

Toshiko MATSUO
Kyushu Kyoritsu University